

美術館通信 vol.51 出品作家による解説と作品鑑賞会

2018年3月24日(土)



3月24日(土)に開催された、「忘れられない。」展のギャラリートークは、顧問として展示に関わっていただいた小金沢智氏を聞き手に、三人の作家がそれぞれ自作の前で解説をする形をとりました。静かな展示ですが、100人近い方が集まり、前が見えないほどでした。熱気に沸いたトークを紹介します。

写真左から、向山喜草氏、カロリーナ・ラケル・アンティッチ氏、前原冬樹氏。

イベント情報

出演	聞き手：小金沢智（太田市美術館・図書館 学芸員） 参加作家：カロリーナ・ラケル・アンティッチ、前原冬樹、向山喜草
日時	2018年3月24日(土) 15:30 - 16:30
参加費	無料（入館料のみ）

終了しました

2018年 春の企画展 **忘れられない、**一浜口隴三、カロリーナ・ラケル・アンティッチ、前原冬樹、向山喜草—
 2018年1月16日(火)～4月15日(日)

[展覧会ページへ](#)



写真左から向山氏、小金沢氏。

小金沢：

ご紹介いただきました小金沢智と申します。「忘れられない。」展の顧問をさせていただきました。今回顧問をさせていただくにあたっては、展覧会のタイトル「忘れられない。」や、三名の作家の方と浜口隴三さんの作品を、できるだけ混ざり合うような形で展示構成の提案などをさせていただきました。一階には浜口隴三作品と向山喜草さんの作品を展示しております。向山喜草さんです。早速ですが、向山さんの制作にあたっての動機やテーマについて伺えますでしょうか。

向山：

私は制作を始めて来年でちょうど30年になります。幼少の時から、祖父が和歌山県北部にある高野山という空海の創建した寺社に仕えた町の大工だったんです。その祖父の背中を見て育ちましたので、作ることを祈ることを五感で感じたと言いますが、両方を同時に知りました。周囲には大工や建築家や美術家、そして非常に尊敬できる僧侶もいました。そのような環境の中で、抽象的な光の世界に惹かれていったのが動機になります。

小金沢：

なるほど。向山さんは、現代では美術作品と呼ばれてもいるものの、それが作られた当時はいわゆる美とのみ言えるわけではない、宗教的なさまざまなものに幼少期触れられる中で、自らも作品を作られるようになったんですね。

向山：

そうですね、密教美術、曼荼羅、非常に荘厳な静謐な大空風、空海理念で、創建された壇上伽藍（だんじょうがらん）という立体曼荼羅があったりする中で遊んできたので。あと少し余談ですけど、お祈りする時に蠟燭に火を灯しますよね。あれで遊ぶのが好きだったんですね。小さい時。

小金沢：

蠟燭の火で遊ぶとは、どういったことですか？

向山：

親にはよく子供が火遊びするなどと怒られたんですけど、ずっと蠟燭を見つめてたらしいですね。火を点けて、（蠟を）たらたら垂らして。高野山にある絵本は仏像がたくさん出てきますが、小学生の時、仏様の顔がない方がもっとかっこいいのと思いついて、それに蠟燭を垂らしていました。制作する前に毎朝祈るんですけど、祈ってから作って、作れたことでまた祈るっていうことを反復して30年経っているので、僕の中では当時と現在の制作する日々とあまり違いがありません。

小金沢：

祈ってから制作されるんですね。



Marugalate intro 2018 アクリル、キャンバス 53.0×53.0

向山：

そうです。習慣でね。お坊さんや大工の背中を見て育ったので、ことさら自分が意識したり意図していたわけではありません。なぜワックス（蠟）を用いて制作をしているのかも（当たり前だったので）、他の方に指摘されてはっとしたというのが正直なところですよ。

小金沢：

自分の身の中に染みついていく経験がおりということですね。

向山：

ずっとワックス（蠟）を使って制作してきて、新たな試みとしてペインティングを始めて4、5年経ちます。光というものは闇と同等で、闇の深さがあって初めて光があると僕は思っているの、その闇と光を重ねることで新しいペインティングが生まれないかと、色々試みています。

小金沢：

幼少期の蠟燭の光の体験にかぎらず、光というと、自然の陽の光、そして人工的な光など、私たちは日々いくつもの光や闇の中で生きています。そういった日常における光や闇のご経験が、向山さんの作品のイメージを作っているのでしょうか。

向山：

光には大きく2つ、瞳を開いて見る光と閉じて見る光があると思っていて、閉じるといっても完全にわかるわけではなく、半分にした状態で見えてくる光の世界、それが祈りや瞑想、メディテーションということかと思うのです。そのような抽象的な光にずっと惹きつけられているってということですかね。

小金沢：

つまり、原体験として幼少期の光の体験はあるけれども、作品を制作するにあたってそれが具体的に反映されるというわけではなく、抽象化されているということでしょうか？

向山：

私の場合、限定されたり、特定しているようなところで自分の心が動くことがあまりないものですが、どこの国の方が見ても、お若い方からお年寄りの方から見ても、一つの普遍的な形象となり得る形があるのではないかと追求し、ミニマムな方向に向かっているということです。

小金沢：

ありがとうございます。ここで展示構成について伺いたのですが、今回は同じ空間にご自分の作品と浜口陽三の作品があります。それは制作や展示構想にあたって、なにかしらの影響を与えましたでしょうか。

向山：

作家さんは皆さんそれぞれにお考えがあるので、他の作家さんの表現について言及したくないんですけども、今回は闇の光を探究された浜口先生と一緒にやらせていただくことになったので、その闇の深さに対し、私の光にどのようなハレーションが起こるか、興味が沸きました。展示候補の浜口作品にはブラックの作品が多かったので、対極的にハレーションが起きやすいよう、比較的カラフルな作品をという調整はしました。

小金沢：

向山さんおっしゃったように、浜口陽三の中でも黒が特徴的な作品を、この一階には展示しております。そうすることで、向山さんの色が空間に浮かび上がるかのような作品が浜口陽三の作品に反射して、お互いが光と闇を照り返すかのような関係を結ぶ部屋が生まれるのではないかなど。

ですので、今日お集まりの皆様にはぜひ相互に行き来するような形で見ていただきたいと思います。